



Q おじい納骨のとき、おばあが「墓の中が全部コンクリートだったら、土地の神様やおじい呼吸できんよ〜」と悲しんでいました。まだおじいの初七日が終わったばかりなので、おじいに可愛がつもらった孫の一人として、おばあを安心させてあげる方法はありませんか？ちなみに、この墓は門中墓ではないので、修理するのは問題ないです(糸満市・Uさん・30代・女性)

A おばあちゃんのお話は、とても考え深い沖縄のしきたりだと思います。コンクリートや大理石のお墓が増えてきた現代ではあまりイメージできないかもしれませんが、昔の時代は、土饅頭(つちまんじゅう)という、大切な遺体を地面に埋葬し、丁寧に小高く盛り上げ、自然の土に還(かえ)すというお墓の様式も、沖縄の一部の地域にあったといえます。

浄土(じょうど)思想

この、土に還(かえ)すという表現を少しだけ勉強してみましよう。沖縄では、ウヤファーフジ(ご先祖様)の世界のことを、よく「グソー＝極楽(ごくらく)」と表現する方々がおられます。この極楽とは、仏様の世界のこと、正式には極楽や浄土(じょうど)などと呼ばれます。この浄土という言葉の中にもありますよ

うに、土という漢字は「自然の土」を表現しながら、ときには「土に還る＝成仏」を敬う象徴として、仏様の世界を表現することもあります。このような考え方から、沖縄では、風葬が主流であったりたくさんのお墓の様式がある中、山の斜面などを掘り込み、直接土の中に納骨するフィンチャー墓というお墓もあります。カーミ(甕)のご遺骨を中心として、天地左右が岩や土に囲まれており、本当に自然の土に、いのちの源が還つていく、そんな心持ちがいたします。

ユスミ(四隅)の石

この土を敬う考え方が一方、コンクリートや大理石のお墓を造る方々が増えたのも事実です。沖縄では、ウシミ(清明祭)や旧暦の七夕にしかお墓に行けないという家庭や地域もあり、お参りに行けない間お墓周辺に雑草が生えないよう、また、台風などの災害にも耐えられるように丈夫で管理しやすいお墓にすることも、ウヤファーフジに対する大切な敬意方だと思えます。

おばあちゃんがおっしゃる「土からコンクリートや大理石になると、土地の神様やおじいちゃんが呼吸できなくなる」という考え方も一理ありますし、コンクリートや大理石の方が、土より丈夫で管理しやすく、結果的にはウヤファーフジが喜んでくださるという考え

方も一理ありますよね。コンクリートのチネー(家庭)墓の場合、Uさんのおばあちゃんが「おつしやる」意見は、納骨のときよく耳にするお話です。そのようなとき、沖縄では「ユスミ(四隅)の石ころ」という解決策があります。

奇数のナンカ(七日)は補足・修復の期間

奇数のナンカは、沖縄のしきたりとして、納骨のとき、お墓のヒラチという入口の蓋が壊れたときの修理する日であったり、四十九日までの補足修復の期間だとの考え方があります。

Uさん家のお墓はこのとき、初七日が終わったばかりですので、解決策として、四十九日の前の三七日・三十五日(五日)の奇数のナンカ(七日)を利用してみてはいかがでしょうか？

ナンカは故人様に対して、自宅の祭壇へのウンチケー(案内)としてお墓参りすることができまますので、このとき、手のひらに乗るような大きさの石ころを4つ、お墓の近くから拾い集めて、ウナー(庭)の広場の四つ角に置きます。4つの石ころを置くことにより、石ころ＝地面＝土と考えられ、そのコンクリートの広場は土とみなされ、フィンチャー墓などと同じようにジーチヌカン(土地の神様)やウヤファーフジ、おじいちゃんが呼吸でき、土に還れるという考え方につながると

いわれます。

地域や家庭によっては、この石ころが砂であったり、サンゴであったり、そのまま土の場合もあるといえます。沖縄では、喪主のおばあちゃんがナンカのウンチケーのとき、お墓に行つた方がいいという地域と、行かない方がいいという地域がありますので、念のため、そのときおばあちゃんにご自宅で留守番をしていただき、おじいちゃんに可愛がつもらつたお子さんやお孫さん達で、『ユスミ(四隅)の石ころ』を行つていただければと思います。大切なことは、お亡くなりになられてから先までも、おじいちゃんの呼吸も含め、安らかなる日々を願うおばあちゃんのお愛情なのではないでしょうか。

